社養協相談援助実習評価表を用いた実習生の主観的な学習達成度に関する調査

～実習指導者からの指導内容及び配属種別との関連を中心に～

十文字学園女子大学　　氏名　大山博幸（06129）
富井　友子（十文字学園女子大学　06578）、

キーワード：相談援助実習評価表、自己評価、実習指導者

１．研 究 目 的

筆者らは、社会福祉士養成校協会が 2013 年に作成した「相談援助実習評価表」を用いて、相談援助実習を受講する学生（以下、実習生）の自己評価結果を対象とした研究を継続している。これまでの結果から、本評価表が実習生の意識として、各々の実習経験から、実習において求められる学習の達成状況が明らかになること、また実習中のケーススタディへの取り組みが学習達成度と関連があることが示唆された（大山・富井 2016、2015）。本研究において今回は特に、相談援助実習事後に実習生に対して求めた自己評価の結果から、評価項目間の関連、配属実習先の種別や実習指導者の指導との関連、実習生における自己評価結果の差異を明らかにすることで、実習指導上の課題を検討することを試みる。

２．研究の視点および方法

筆者らが担当する X 女子大学の平成 28 年 2 月から 3 月に、原則、1 回目の実習として 60 時間以上、また 8 月から 9 月にかけて 2 回目の実習として 120 時間以上の計 180 時間以上の相談援助実習を行う実習生 45 名（3, 4 年生）に本調査を実施した。2 回目の実習事前、事後にそれぞれ実習生自身が自己評価として記入できるように各チェック項目における評価基準の表現を修正した評価表を作成した（以下自己評価表）。自己評価表は、評価基準を「4：十分達成できた、3：だいたい達成できた、2：ある程度達成できた、1：あまり達成できなかった、NA:やっていない」とした教示文で回答を求めた。なお評価基準はリッカートスケールとみなし NA を 0 点として集計、解析を行った。また２回目の実習事前には、対象となる実習生に対して上記実習事前の自己評価表の項目及び実習先の種別を問う質問と学生の年齢及び氏名を問う質問によって構成された質問紙に記入を求め、２回目の実習終了後に、実習事後の自己評価表及び実習指導者に関する質問９項目（4：あてはまる、3：ややあてはまる、2：あまりあてはまらない、1：あてはまらない、NA:実習指導者だったのかどうかわからないの 5 件法）及び学生の氏名を問う質問によって構成された質問紙の記入を求めた。調査協力に同意した 45 名のうち分析に有効となる 33 名のデータを対象とした（有効回答率 73.3%）。なお、33 名において、2 回とも同じ実習配属先で実習をした者は 18 名（54.5%）、異なった実習配属先で実習をした者は 15 名（45.5%）であった。

３．倫理的配慮

実施前に学生に本研究の調査の依頼をした。その際、氏名を記入するのはデータの対応関係を知るためであって、本調査の結果は授業の成績評価とは関連のないこと、質問紙調

査票の記入を拒否することができることを文章にて説明し、本調査に協力するか否かを同意書の記入によって求めた。なお本研究において筆者らが所属する大学の研究倫理委員会より審査を受け承認を得た。

4．研 究 結 果

自己評価表の小項目は51あるが、これらは厚労省シラバスの教育内容ア～クの8項目（以下大項目）に分類される。図1に大項目として集約した平均得点を、表1に実習指導者の指導内容に関する項目の結果を示す。

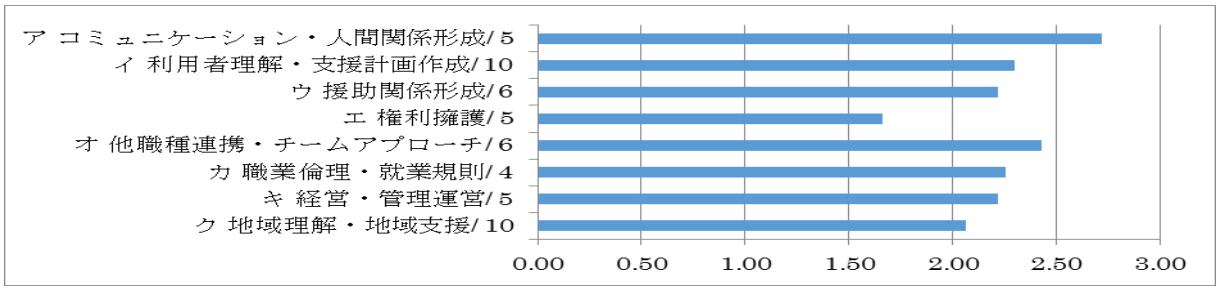

図1　大項目平均得点の結果（得点の範囲は0-4点）

表1　実習指導者の指導内容に関する項目の結果

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
4201.オリエンテーション時もしくは実習中に、実習指導者と、実習課題（実習目標）について話し合った。	33	1	4	3.33	0.89
4202. オリエンテーション時もしくは実習中に、実習指導者と、実習計画や実習の予定について話し合った。	33	1	4	3.39	0.83
4203.毎日、実習指導者から直接、何らかの説明や指導を受けた。	33	2	4	3.48	0.67
4204. ケーススタディ（事例検討）ワークシート作成に関する指導を、実習指導者から受けた。	33	1	4	3.24	0.83
4205.ケーススタディ（事例検討）ワークシートの記述に対して、実習指導者からコメント、評価をもらった。	33	1	4	3.12	1.05
4206.実習半ばあるいは後半に、実習に対する反省会（振り返りの機会）が、実習指導者から直接行われた。	33	2	4	3.73	0.57
4207.実習指導者に疑問などを質問することが十分にできた。	33	1	4	3.64	0.70
4208.実習中困った時、実習指導者は助言、サポートしてくれた。	33	2	4	3.67	0.60
4209.実習指導者からのスーパービジョン（実習指導）には、満足している。	33	2	4	3.61	0.61

大項目の結果から、クラスタ分析（ward 法）により、高得点群（N=7, 21.2%）、中得点群（N=16, 48.5%）、低得点群（N=10, 30.3%）の3群に分け、これらを独立変数として、各大項目の平均得点を従属変数として1要因の分散分析を行ったところ、すべてにおいて有意な結果が見られた（有意水準5%）。またこの3群を独立変数に、実習指導者の指導内容に関する各項目を従属変数に、1要因の分散分析を行ったところ、「オリエンテーション時もしくは実習中に、実習指導者と、実習計画や実習の予定について話し合った」「毎日、実習指導者から直接、何らかの説明や指導を受けた」「実習指導者からのスーパービジョン（実習指導）には、満足している」の3項目において有意な結果が見られた（有意水準5%）。

また、実習配属先を機関系と施設・通所系の2種類に分け、それらの各大項目の平均得点を比較したところ（t 検定）、有意な差は見られなかった（有意水準5%）。

5. 考 察

本研究結果から、実習生の自己評価においては、実習指導者との実習計画や予定についてのやり取り、及び日々の実習指導者からの直接的な指導が、学習達成度と関連があることが示唆された。また機関系と施設・通所系といった実習配属先の形態と学習達成度とは、関連が見られないことが示唆された。